

大日本外務大臣男爵小村壽太郎閣下

楊 樞 謹 具  
第四十二號

光緒二十九年十二月二十八日

敬啓者本大臣現接敵國外務部來電內開日俄失和朝廷以兩國均係友邦重念鄰好奉旨諭按局外中立之例辦理業經通行各省一律遵守並嚴飭彈壓地面保護商教盛京與京爲陵寢宮殿所在責成該將軍敬謹守護東三省城池衙署民命財產兩國均不得損傷原有之中國兵隊彼此各不相犯遼河以西俄已退兵之地由北洋大臣派兵駐紮各省及沿邊內外蒙古均按照局外中立之例辦理兩國兵隊勿稍侵越倘闖入界內中國自當攔阻不得視爲失和惟滿洲地方尙有外國駐紮兵隊未經退出之地面中國力有未逮恐難實行局外中立之例東三省疆土權利無論兩國勝負仍歸中立自主不得借端除照會駐京各使外希向大日本外務大臣切實聲明爲要等因到本大臣承准此相應照會貴大臣請將以上事理轉達貴政府查照辦理望切施行專此奉布敬頌時祉  
大日本外務大臣男爵小村壽太郎閣下

楊 樞 謹 具  
第四十三號

光緒二十九年十二月二十八日

我カ外務大臣ノ復牒

機密送第一號

以書東致啓上候陳者日露兩國開釁之際シ貴國政府ニ於テ局外中立ヲ守ラル、ノ義ニ關シ外務部ノ電訓ニ依リ本月十三日附第四十二號及ヒ第四十三號貴東ヲ以テ續々御來意ノ趣致敬承候

帝國政府ハ出來得ル限リ貴國內ニ於ケル平和ナル事態ノ擾亂ヲ防遏セントコトヲ希望スルモノニ有之候ニ付露國ノ占領スル地方ヲ除クノ外總テ貴國ノ版圖内ニ於テハ露國ニ於テモ同様ノ舉措ニ出ル限リ貴國ノ中立ヲ尊重可致候

帝國軍隊カ戰場ニ於テ守ルヘキ交戰法規ハ素ヨリ安リニ財產ヲ破壞スルカ如キコトヲ許容不致候ニ付盛京及興京ニ於ケル陸寢宮殿並ニ各地所在ノ貴國官衙カ露國ノ所爲ニ原因スルニアラスシテ何等損傷ヲ被ルコトナカルヘキハ貴國政府ニ於テ御安信相成又戰鬪地域内ニ於ケル貴國ノ官民ニ關シテハ軍事上ノ必要之ヲ允ス限リ帝國軍隊ニ於テ其身體財產ヲ十分ニ尊重保護可致候尤モ該官民ニ於テ帝國ノ敵タルモノニ幫助及ヒ厚遇ヲ與フル場合ニ於テハ帝國政府ハ臨機必要ノ措處ヲ採ルノ權利ヲ保留致候

帝國ト露國ト旗鼓相見ルニ至リタルハ素ヨリ征畧ノ目的ニ出テタルニアラス偏ニ我正當ノ權利及利益ヲ防護セシカ爲メニ有之候ヲ以テ戰爭ノ結果清國ヲ犧牲トシテ領土獲得ヲ行フカ如キハ毫モ帝國政府ノ意圖ニ存セサル所ニ候將又貴國領域中兵馬ノ衝ニ當レル地方ニ於テ採ルコトアルヘキ措置ニ至テモ一ニ軍事上ノ必要ニ因ルモノニ有之敢テ貴國ノ主權ニ對シ毀損ヲ如フルニアラサルコトハ貴國政府ニ於テ篤ト御領會相成候様致希望候

右照覆得貴意旁本大臣ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候敬具

明治三十七年二月十七日  
外務大臣 男爵 小村 壽 太 郎

大清特命全權公使楊樞閣下

第三章 開戰當時帝國港灣ニ在泊スル露國船舶拿捕免除ニ關スル件

明治三十七年一月中旬ニ至リ日露兩國ノ關係益切迫ヲ告ケ何時其ノ破裂ヲ見ルヤモ計ラレサル  
第二篇 第三章 開戰當時帝國港灣ニ在泊スル露國船舶拿捕免除ニ關スル件 二十三

モノアルニ至レリ、然ルニ當時ニ於テハ日露兩國間ノ交通頗ル頻繁ニシテ、我カ國ニ來往スル露國商船亦尠シトセス、而テ近代ノ國際慣行ニ依レハ、開戰當時敵國商船ニ對シテ、一定シテ恩惠期間ヲ與フルハ其ノ常規トスル所ナルヲ以テ、山本海軍大臣ハ露國ノ態度如何ニ關セス、我カ國ニ於テハ他クマテ公正ノ手段ニ出ツルヲ得策ナリトシ、開戰當時帝國港灣内ニ在泊スル露國商船拿捕免除ニ關スル勅令案、竝ニ露國義勇艦隊所屬船艙及ヒ官用船艙ノ捕獲ニ關スル閣令案ヲ具シ、戰時ニ移ルト同時ニ之ヲ實施スルノ處置ヲ執ランカ爲メ、一月十九日各關係大臣ノ連署ヲ以テ、之ヲ閣議ニ提出シタリ、露國商船拿捕免除ニ關スル件ハ、閣議ノ決定ヲ得成規ノ手續ヲ經タル上、日露兩國艦隊ノ戰闘開始後、二月九日ヲ以テ勅令トシテ之ヲ公布シ、又露國義勇艦隊所屬船艙及ヒ官用船艙ニ關スル件ハ、法制局ニ於テ審議ノ結果、陸海軍大臣ノ内訓案ト爲スヲ適當ナリトシ、一月二十四日更ニ海軍大臣ヨリ案ヲ具シテ、陸軍大臣ニ協議ノ上、之ヲ閣議ニ提出シ、二月五日閣議ヲ得、二月九日ヲ以テ陸海軍大臣ヨリ内訓トシテ、各部下官憲<sup>海軍ニ在リテハ各鎮守府司令長官各要港部司令官第一等海軍大臣ヨリ</sup>電訓シタリ、<sup>第二第三艦隊司令長官細谷司令官及ヒ各開港場ニ在ル大督備艦高雄天龍</sup>ニ電訓シタリ、

第一 露國商船拿捕免除ニ關スル勅令  
朕露西亞帝國商船捕獲免除ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御璽

明治三十七年二月九日

内閣總理大臣 伯爵 桂 太 郎  
海軍大臣 男爵 山 本 權 兵 衛  
外務大臣 男爵 小 村 壽 太 郎

勅令第二十號

第一條 本令施行ノ際帝國港灣内ニ在ル露西亞帝國商船ハ明治三十七年二月十六日迄ニ該港灣ニ於テ其ノ貨物ヲ陸揚シ又ハ船積シテ帝國ヲ去ルコトヲ得

第二條 前條ノ規定ニ依リ帝國ヲ去リタル露西亞帝國商船ハ帝國官廳ノ證明シタル船舶書類ニ依リ前條ノ期限前ニ其ノ貨物ヲ陸揚シ又ハ船積シテ帝國港灣ヲ發航シ該港灣ヨリ其ノ最近本國港租借港又ハ到達港ニ到ルノ途中ナルコト明カナルモノニ限り之ヲ拿捕セス但一旦本國港又ハ租借港ニ立寄りタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第三條 明治三十七年二月九日以前帝國港灣ニ向テ外國港灣ヲ發航シタル露西亞帝國商船ハ帝國港灣ニ入り該港灣ニ於テ直ニ其ノ貨物ヲ陸揚シテ帝國ヲ去ルコトヲ得  
前項ニ依リ帝國ヲ去リタル露西亞帝國商船ニ關シテハ前條ノ規定ヲ準用ス

第四條 輸出禁止品、戰時禁制品又ハ戰時禁制品ヲ搭載スル露西亞帝國商船ニ關シテハ本令ノ規定ヲ摘要セス

附 則

本令ハ發付ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本案提出ノ理由ヲ明ニスル爲メ、閣議提出當時本案ニ添付シタル説明ヲ左ニ掲ク

說 明

公海又ハ交戰國領海ニ於テハ開戰ノ後直ニ敵國船舶ヲ捕獲スルヲ得ルハ勿論間、敵國官船ノ捕獲ニ依リテ戰争ノ開始セラレタルコトアリ而テ十八世紀ニ於テハ戰争ヲ開始スルニ殊ニ敵國船舶カ自國港灣ニ幅渡シタル時ヲ選ヒ是等船舶ヲ捕獲スルヲ戰争ノ第一著手トナシタリシカ近代ハ商業上ノ利益ト正義ノ感念トノ高マリシカ爲メ斯ノ如キ船舶ヲ斯ノ如クシテ捕獲スルヲ府トセサルノミナラス開戰ノ當時交戰國ノ港灣ニ碇泊スル敵國ノ商船ニ對シテハ若干時日

第二篇 第三章 開戰當時帝國港灣ニ在泊スル露國船舶拿捕免除ニ關スル件 二十五

ノ猶豫ヲ與ヘ以テ其ノ商事取引ヲ終ヘ貨物ヲ揚卸シテ出港スルヲ慣例トスルニ至レリ  
千八百五十四年ノクレミア戦争ノ始ニハ英佛共ニ六週間ノ猶豫ヲ與ヘタリ當時佛國ヨリ發シ  
タル千八百五十四年五月二十七日ノ宣言ニ曰ク

佛國ノ海港ニ在ル露國商船ノ出港ニ對シテハ今日ヨリ六週間ノ猶豫ヲ與フ是故ニ露國商船  
ニシテ現ニ我カ港灣ニ在ルモノ又ハ宣戰前ニ露國港灣ヲ發シテ我カ港灣ニ入ルヘキモノハ  
五月九日マテコ、ニ滞在シテ其ノ取引ヲ全クスルコトヲ得是等商船ニシテ佛國港灣ヲ出テ  
タル後我カ巡洋艦ノ爲メニ捕獲セラル、アリトモ其ノ船舶書類ニ依リテ其ノ船カ直接ニ仕  
向地ニ航シ而テ尙コ、ニ送セサル途中ナルコトヲ證スルニ於テハ解放スヘキモノトスト  
千八百七十年ノ普佛戦争ニ際シ佛國ハ三十日ノ猶豫ヲ與ヘ普魯西ハ其ノ始メ商船ヲ捕獲セサ  
ルコトヲ宣言シタリシカ後此ノ宣言ヲ取消シ凡ソ二十日間ノ猶豫ヲ與ヘタリ但シ此ノ猶豫ハ  
單ニ自國港灣ニ在ルモノニ止ラス一般ノ敵國商船ニ之ヲ與ヘタリ當時佛國カ其ノ海軍ニ發シ  
タル訓令中ニ曰ク左ノ船舶ハ捕獲スルヲ得ス  
敵國商船ニシテ現ニ佛國港灣ニ在ルモノ又ハ開戰ノ事ヲ知ラスシテコ、ニ入ルモノハ其ノ  
出港ニ對シ三十日ノ猶豫ヲ與フヘキモノトス而テ是等商船ニハ附録第三號ノ通行券ヲ交付  
ス

其ノ他敵國商船ニシテ宣戰前佛國ヲ仕向地トシテ佛國ノ爲メ積荷ヲナシタルモノハ捕獲ヲ  
免レ自由ニ其ノ貨物ヲ佛國港灣ニ卸シ通航權ヲ得テ本國ニ歸航スルコトヲ得  
千八百七十七年露土戦争ニ於テハ土耳其ハ露西亞ノ船舶ニシテ土耳其水面ニ在ルモノニ對シ  
テ五日間ノ猶豫ヲ與ヘタリ蓋露國船舶ハ其本國ヲ距ル遠カラサルヲ以テ斯ノ如キ短期ノ猶豫  
ヲ與ヘタルモノナリ露國ハ現ニ其ノ港灣内ニ在ル土耳其船舶ノミニ對シテ別ニ日ヲ限ラヌシ

テ貨物ヲ積込ムニ必要ナル猶豫期間ヲ與ヘタリ故ニ開戰後新ニ露國港灣ニ入リタルモノハ開  
戰ノ事實ヲ知ラサルモ尙捕獲ヲ免レサルコト、ナレリ  
米西戦争ニ際シ米國ハ西國商船ニ對シ三十日ノ猶豫ヲ與ヘ以テ貨物ヲ積載シテ出發スルヲ許  
シ又米國船舶カ海上ニ於テ是等商船ニ令シ其ノ書類ヲ調査シ其ノ上記ノ期限前ニ貨物ヲ搭載  
シタルモノナリコト明ナルトキハ敵國ノ陸海軍ニ從事スル士官又ハ石炭(其ノ商船ノ航海ニ必  
要ナルモノヲ除ク)禁止物品戰時禁制品及ヒ西國政府ニ往復ノ文書ヲ搭載セルモノ、外其ノ航海ヲ繼續スルコト  
ヲ許シ又開戰以前米國ニ向ヒ外國港灣ヲ出發セル西國商船ニ對シテハ米國港灣ニ入り貨物ヲ  
陸揚シ直ニ出發スルコトヲ許シタリ西班牙國ニ於テハ勅令發布ノ日ヨリ五日間ヲ限リテ同國  
ニ在泊セル米國船ノ自由ニ出發スルコトヲ許シタリ

現今ノ國際法ノ「オーソリチー」タル萬國國際法學會ハ千八百九十八年八月海牙會議ニ於テ外國  
港灣ニ在ル艦船及ヒ其ノ乗員取締法ヲ議決セシカ其ノ強制處分及ヒ戰時ニ於ル規定中ノ第四  
十條ニ曰ク  
敵對行為ノ初メ又ハ宣戰ノ當時敵國ノ港内ニ在ル船舶ハ其ノ國ノ定メタル期間内ハ拿捕セ  
ラル、コトナシ其ノ期間内ハ貨物ヲ陸揚シ又ハ積入ル、コトヲ得  
以上ノ慣例及ヒ學說ニ徵スレハ日露開戰ニ際シテモ我カ港灣ニ在ル露國商船ニ對シ一定ノ猶  
豫期間ヲ與ヘテ其ノ貨物ノ陸揚又ハ積入ヲ許スハ至當ナルコト、信ス  
前記千八百七十七年露土戦争ノ例ニ徵スレハ露國ハ我カ商船ニ對シ或ハ極テ僅少ナル猶豫期  
間ヲ許スノ方針ニ出ツルヤモ知ルヘカラス然レトモ我カ國ハ軍事上緊要アラサル限ハ勉テ國  
際法上ノ慣例ニ依リ公正ノ手段ニ出ツルヲ可トス萬一露國ニシテ必要ナル猶豫期間ヲ與ヘス  
直ニ我カ商船ヲ拿捕スル等ノ手段ニ出ツルアレハ我ハ之ニ對スル報復トシテ直ニ我カ領海内

ニ在ル露國商船ヲ差押ヘ又ハ我カ領内ニ在ル露國臣民ノ財產ヲ差押フル等相當ノ手段ヲ執ルモ不可ナル所ナシ

第二 露國義勇艦隊所屬船舶官用船舶ニ關スル件

内訓

露西亞帝國義勇艦隊ニ屬スル船舶及ヒ該帝國官用船舶ハ明治三十七年勅令第二十號ノ規定ニ關係ナキモノニシテ拿捕ヲ免除スヘキ限ニアラス此旨心得ヘシ

明治三十七年二月九日

海軍大臣  
陸軍大臣

本案提出當時添付シタル説明書左ノ如シ、

説明

露國ハ一國ノ船舶ニシテ其ノ所屬本國ノ習慣ニ從ヒ軍艦旗ヲ掲クル許可ヲ得又海軍將校之ヲ指揮スルトキハ其ノ船舶ノ容積使用及ヒ乗員數ノ如何ニ關セス凡テ之ヲ戰爭ノ爲メニ艦裝セルモノト認ムルコト其ノ千七百八十二年丁抹船サンジャン號事件ニ對シテ發表セル意見ニ依リ明ナリ而シテ義勇艦隊ハ其ノ性質ヨリシテ之ヲ見レハ

一、船舶ハ私有物ナリ

二、船長及ヒ少クトモ一人ノ士官ハ皇帝ヨリ任命セララル

三、平時ハ商船旗ヲ掲クレトモ其ノ國家ノ勤務(兵士輸送等)ニ服スルトキハ軍艦旗ヲ掲ク

四、戰時ハ其ノ海軍ニ編入セララル

以上ノ事實ヲ綜合シテ考案スレハ露國義勇艦隊ハ英國學者ホール氏ノ意見ノ如ク戰時ニ於テ

始テ國家ノ公有船舶ニ變スルコトヲ得ヘキモノニアラスシテ平時ヨリシテ既ニ其ノ海軍ニ隸屬スルモノト看做スコトヲ得假令一步ヲ讓ルモ戰時ニハ當然其ノ海軍ニ編入セララルヘキモノナルカ故ニ露國義勇艦隊ニ對シテハ必シモ猶豫期間ヲ與フル必要ナク直ニ之ヲ捕獲スルコトヲ得ヘシ但露國義勇艦隊ノ捕獲ハ特ニ明文ヲ以テ之ヲ規定スヘキ必要ナク戰時ニ至リテハ交戰行爲トシテ直ニ之ヲ實行スルコトヲ得ルモノトス

前記ノ二法令ハ初メ閣議ニ提出スルニ際シテ執行上ノ便宜ヲ慮リテ參考ノ爲メ一月十八日海軍次官ヨリ之ヲ部内關係官憲ニ内示シタリシカ關係官憲ヨリハ其ノ適用上ノ疑義ニ就テ伺出テタル點アリ又主務局ヨリ別ニ解釋ヲ與ヘタルモノアリ此等ハ總テ前記法令ノ精神ヲ明ニスルモノアルヲ以テ左ニ之ヲ概叙ス、

一、佐世保鎮守府參謀長ヨリ東清鐵道會社船舶ハ内訓案ノ義勇艦隊ノ船舶ト同様ニ處分シ然ルヘキ歟ノ伺ニ對シ軍務局長ハ之ヲ否定セリ

二、佐世保鎮守府參謀長ヨリ勅令案ニ關シ第一條ニ該港灣ニ於テ其ノ貨物ヲ陸揚シ又ハ船積シテ帝國ヲ去ルコトヲ得トアルハ荷積ノ有無ニ關セス一週間ヲ期シテ帝國ヲ去ルヲ得ト解スヘキヤ又第三條中ノ年月日ハ本令發布ノ當日ト認ムヘキヤノ伺ニ對シ軍務局長ハ第一點ハ現ニ貨物ノ積卸シヲ爲サ、ルモノト雖モ一週間ノ猶豫ヲ與フヘク又修理中ノモノ等モ同様ナルノミナラス或場合ニハ其ノ期限後ト雖モ航海ニ差支ナキ迄ノ修理ヲ終ヘテ出港セシムル等ノ事例モアリ又第二點ニ付テハ第三條中ノ月日ハ第一條中ノ月日ト同期日ナリト回答セリ

三、海軍省副官ヨリ與ヘタル解釋ハ左ノ如シ  
(イ)勅令第二十號ニ關シテハ

拿捕シタル船舶ハ總テ捕獲審檢所ニ引致スヘキモノトス

第二篇 第三章 開戰當時帝國港灣ニ在泊スル露國船舶拿捕免除ニ關スル件

本例發布前帝國港灣ヲ去リ航海中ノモノハ拿捕スヘキモノトス

第二條ニ依リ帝國港灣ヲ發シ他ノ帝國港灣ニ移リタル場合ハ拿捕スヘキモノトス

第二條ニ依リ帝國ヲ去リ其ノ途中中立港ニ立寄リタルモノハ拿捕スヘキモノニアラス但

シ第四條ニ依ルヘキハ勿論トス

第二條ニ依リ拿捕免除ヲ享クヘキモノト雖モ其ノ封鎖港ニ赴カムトスルモノハ固ヨリ拿

捕スヘキモノトス

敵國商船ヲ拿捕シタルトキハ其ノ商船ニ在ル旅客ニシテ敵ノ用ヲ爲サ、ル者婦人小兒等

ハ皆解放シ適宜ノ港ニ於テ成ルヘク速ニ上陸セシムルヲ宜シトス

第四條ノ輸出禁止品云々ヲ搭載シテ帝國港灣ニ入ルモノト雖モ同港灣發航ノ際之ヲ搭載

セサルモノハ本令ノ免除ヲ享クヘキモノトス

(ロ)義勇艦隊所屬船舶ニ關スル内訓ニ就テハ

中立國船舶ニシテ敵ノ海陸軍ノ用ヲ爲スモノ又ハ海陸軍用トシテ敵ノ管理ノ下ニ在ルモ

ノハ其ノ官用船舶ニ準シ之ヲ捕獲シ又ハ破壊スルコトヲ得ヘキモノトス

敵ノ官用船舶ト雖モ單ニ慈善事業學術探檢ニ従事スルモノ竝ニ赤十字條約ニ依ル病院船

ナルトキハ捕獲スルコトヲ得ス

遠洋漁船即チ捕鯨船ノ如キハ勅令第二十號ニ謂フ所ノ商船ニアラサルカ故ニ拿捕猶豫ヲ

受クヘキモノニアラス又國際法ノ慣例ニ依リテ捕獲ヲ禁セラレタル漁舟ノ中ニ入ルヘキ

モノニアラサルカ故ニ開戰ニ際シ直ニ拿捕スルヲ得ヘキモノトス

茲ニ附言スヘキ一事アリ、勅令第二十條第三條中ノ日附正誤ニ關スル顛末是ナリ、初メ海軍省ニ於

テ同勅令案ヲ起草スルニ當リテハ、第三條ニ依リ拿捕免除ヲ受クヘキ露國商船ハ開戰以前、即チ二

月九日以前ニ外國港灣ヲ發航シテ我カ國ニ來航スルモノニ限ルノ趣意ナリシカ、同勅令ノ發布セ  
ラル、ヤ、右第三條中ノ日附ハ二月九日ニアラスシテ、第一條ノモノト同シク二月十六日トナリ居  
レリ、海軍省ニ於テハ同勅令發布後、三四日ヲ經テ初テ其ノ錯誤ヲ發見シ、原因ヲ調査シタルニ、海軍  
省主務者カ、右第三條ノ日附ニ關シテ、法制局ノ協議ヲ受ケ、誤リテ回答ヲ發シタルニ基クモノナル  
コトヲ知レリ、然レトモ同勅令第三條ノ規定タル、前記ノ如ク開戰ノ事實ヲ知ラサル敵船ニ對シテ、  
直ニ交戰權ノ行使ヲ避ケントスルニアルヲ以テ、發布セラレタル條文ニ依ルトキハ、全然勅令ノ精  
神ヲ沒了スルノ不體裁ヲ生シ、加フルニ該勅令ノ如キハ戰時ニ於ル一事例トシテ、列國ノ視聽ヲ惹  
キ、又永ク後世ニ傳ハルヘキモノナルヲ以テ、立法ノ趣旨ヲ明ニスル必要上、是非共之ヲ訂正スルヲ  
要スルニ依リ、時日ノ經過シタルニ拘ラス、海軍省ハ二月十二日內閣ニ其ノ訂正方ヲ請求シ、翌十三  
日ノ官報ニ於テ之ヲ二月九日ト訂正シタリ、又本件ハ事實體ニ關スル重大ナル過誤タリシヲ以テ、  
齋藤海軍次官ヨリ、柴田內閣書記官長ニ宛テ、訂正ノ理由及ヒ錯誤ヲ生シタル關係ノ手續書ヲ送リ、  
且主務省ニ對シ相當ノ處分ヲ加フヘキ旨通知セリ、而テ一方ニ於テハ山本海軍大臣ハ、同十三日部  
内ニ對シテ左ノ電訓ヲ發シ、以テ露國商船カ右訂正ノ爲メ蒙ルヘキ不幸ヲ減少スルコト、セリ

二月十三日發訓電

勅令第二十號露西亞帝國商船拿捕免除ニ關スル件第三條中ノ、二月十六日以前トアルヲ本日ノ  
官報ニテ、二月九日以前ト訂正セラレタルニ付テハ外國港灣ヲ發航シタル露國商船ハ其ノ發航  
前訂正ノ事實ヲ知リタルコト明ナルモノニ限り之ヲ拿捕シ其ノ他ノモノハ拿捕ヲ免スル儀ト  
心得ヘシ

明治三十七年二月十三日

海 軍 大 臣

聯合艦隊司令長官  
第三艦隊司令長官  
各鎮守府司令長官  
各要港部司令官

第四章 捕獲規程ノ制定

第一節 明治二十七年捕獲規程ノ一時實施

第一目 明治二十七年捕獲規程實施命令

明治二十七年一月二十八日、山本海軍大臣ハ海軍少將坂本俊篤、海軍中佐太田三次郎、海軍省參事官山川端夫、同遠藤源六ノ四名ニ、海軍捕獲ニ關スル諸法規取調委員ヲ命ジ、捕獲規程其ノ他關係法規案ヲ立案セシメタリ、而テ其ノ調査未タ完了スルニ及ハスシテ、日露兩國ノ外交關係破裂スルノ機ニ逼リタルヲ以テ、取敢ヘス當時既ニ效力ヲ失ヒタル明治二十七年大本營制定ノ捕獲規程ヲ復活シテ、新法規發布迄之ヲ施行スルコト、シ、山本海軍大臣ハ二月五日左ノ內令ヲ電達セリ、  
內令第六十九號

日露交戰中何分ノ命令アルマテ明治二十七年大本營制定捕獲規程ヲ適用スヘシ

明治二十七年二月五日

海 軍 大 臣

聯合艦隊司令長官

第三艦隊司令長官

各鎮守府司令長官

各要港部司令官

細谷第三艦隊司令官

千代田、高雄、天龍、葛城、大和、天城、愛宕、筑紫各艦長宛

（參照）

今般捕獲規程別冊之通制定候條此旨心得ヘシ

明治二十七年九月七日

大 本 營

捕獲規程

第一章 船舶ノ拿捕

第一條 帝國軍艦ハ敵船若クハ嫌疑アル船舶ノ進航ヲ止メ之ヲ拿捕スルコトヲ得

第二條 左記ノ船舶ハ敵船トシテ拿捕スルコトヲ得

一、運送船トシテ敵國政府ノ備入レタル船舶其ノ備入敵國政府ノ脅迫ニ依レル時亦同シ

二、敵國ノ旗章及通航券ヲ有スル船舶

三、敵國政府ノ免狀ニ依リ航海スル船舶

四、何レノ國籍ニ屬スルヲ問ハス敵國軍艦ノ保護ノ下ニ航海スル船舶

五、假令船舶書類面ハ帝國臣民若クハ同盟國若クハ中立國ノ船ナルモ一部若クハ全部敵ノ所

有ル係ル船舶

六、外見ハ帝國、同盟國若クハ中立國ニ住所ヲ有スル人ノ所有船舶ナルモ其ノ船舶ハ出港後ニ

敵ヨリ買受ケタルモノニシテ尙ホ進航中ニアリテ未タ其人ノ占有ニ歸セサルモノ

七、外見ハ帝國、同盟國若クハ中立國ニ住所ヲ有スル人ノ所有船舶ナルモ若シ其ノ所有者開戰

後若クハ開戰前豫メ開戰ヲ慮リテ該船舶ノ所有權ヲ敵ヨリ得タルモノナルトキハ取引ノ

第二篇 第四章 捕獲規程ノ制定